

<文化財の種類 有形文化財（彫刻）>

<p>名 称</p>	<p>つばい はちまんぐう もくぞうはちまんさんしんざぞう わかみやしんざぞう 壺井八幡宮 木造八幡三神坐像及び若宮神坐像 そうぎょうはちまんしんざぞう く ちゅうあいてんのうざぞう く じんぐうこうごうざぞう く (僧形八幡神坐像 1 軀、仲哀天皇坐像 1 軀、神功皇后坐像 1 軀、 にぎわかみやしんざぞう く あらわかみやしんざぞう く 和若宮神坐像 1 軀、荒若宮神坐像 1 軀) じんぐうこうごうざぞうぞうないのうにゆうひん 附 神功皇后坐像像内納入品 しほんぼくが ぼくしょにつかじぞうぼさつずぞう かん (紙本墨画・墨書日課地藏菩薩図像 1 卷)</p>
<p>員 数</p>	<p>5 軀、附 1 卷</p>
<p>所在地</p>	<p>羽曳野市壺井 6 0 5 番地 2</p>
<p>所有者</p>	<p>宗教法人 壺井八幡宮</p>
<p>年 代</p>	<p>南北朝時代</p>
<p>説 明</p> <p>本神像は、壺井八幡宮（羽曳野市壺井）の祭神として本殿に祀られる八幡三神坐像と、2 軀の若宮神坐像である。八幡三神坐像は、主神である僧形八幡神坐像と仲哀天皇坐像、神功皇后坐像の 3 軀で構成され、若宮神坐像 2 軀はそれぞれ八幡神の和若宮神坐像と荒若宮神坐像とされる。</p> <p>壺井八幡宮の所在する壺井の地は、11 世紀前半に源頼信が館を構えた河内源氏の本拠地であり、壺井八幡宮は河内源氏の氏神であった。源頼義とその子息義家が、前九年の役（永承 6 年（1051）～康平 5 年（1062））への出陣に際して、源氏の氏神である石清水八幡宮に戦勝祈願の参詣をし、その験あって戦功を上げることができたため、報謝の意味を込めて康平 7 年（1064）、八幡神を壺井の地に勧請したのが起源という。八幡三神は、応神天皇である僧形八幡神を主神として、両脇に二女神を配する構成も多いが、本神像は男神である仲哀天皇と女神である神功皇后を両脇に配置する構成をとる。この形式は平安時代後期の石清水八幡宮で成立していたとされることから、同宮から勧請した神名と構成が壺井八幡宮へ伝わり、本神像にも踏襲されたと考えられている。</p> <p>本神像 5 軀は、少し面長で良く張った顔、細く切れ長な目、長い鼻梁といった面相をはじめとして、その作風が共通するため一具といえる。これらは南北朝時代の作であり、なかでも仲哀天皇坐像と神功皇后坐像については、像底に正平 9 年（1354）の墨書銘が存在することから、造立年が明らかである。さらに、正平 8 年（1353）の奥書を記す千体の地藏菩薩像を描いた卷子 1 卷が神功皇后坐像の像内に納入されていたことも、特筆される。</p> <p>また、神功皇后坐像像底の墨書銘からは、本像を制作した仏師が四天王寺大仏師の頼円法眼と子息実円であることも明らかとなる。彼らが撰津国四天王寺（大阪市天王寺区）に属した仏師である</p>	

ことは、本神像5軀と面相などの作風がよく似る和歌山県^{ことうりじ}広利寺十一面観音立像の像内に記された正平8年7月の墨書銘に、四天王寺大仏師として頼円と子息実円が登場することから判明する。現在、四天王寺仏師の手による作例は、本神像5軀と広利寺十一面観音立像の2例しか確認されていないものの、広利寺十一面観音立像が本来河内国^{わかえ}若江（八尾市・東大阪市）西方寺^{さいほうじ}の像として造立されていることより、四天王寺仏師は、壺井や若江といった中河内地域を含む、四天王寺を中心とする地域にて活動をした仏師たちといえよう。また、製作者である頼円と実円がともに「円」を名に持つことや、例えば少し面長で丸みを帯びた顔立ち、穏やかな作風などから、彼らは円派の仏師とみられており、本神像は鎌倉時代後期以降における円派の地方展開を示す事例として位置づけられる。

各像ならびに納入品の概要は以下の通りである。

○八幡三神坐像

・僧形八幡神坐像

本殿中央に祀られる。木造（ヒノキ）、寄木造、彩色。円頂。三道を刻す。內衣、法衣を着し、袈裟^{けさ}をまとい左肩部で吊す。右臂を屈して如意（爪頭を亡失）を執り、左手は軽く握り膝上に置く。上^{あげだたみ}畳座に坐す。法衣は蓮華丸文の間に蔓唐草文、袈裟には蓮華唐草や輪宝文などをあらわす。南北朝時代の作。

【法量】像高 50.8cm、頂一顎 17.3cm、面幅 11.2cm、耳張 14.0cm、面奥 14.6cm、胸奥（右）15.2cm、腹奥 18.5cm、臂張 35.7cm、袖張 56.6cm、膝張 47.3cm、坐奥 35.5cm、膝高（左）9.5cm、膝高（右）10.0cm

【品質構造】八幡三神坐像3軀共通して、頭体を両耳上から体側を通る線で前後二材^は矧ぎとし、両肩を寄せ、内^{うち}剝りを施し、襟に沿って割首とする。膝前は横材を寄せ、袖口・袂^{たもと}・手首などは別材を矧ぎ、体部背面に薄板材を当てる。黒漆、白色下地、彩色、盛上げ彩色を施す。

・仲哀天皇坐像

本殿向かって右側に祀られる。木造（ヒノキ）、寄木造、彩色。巾子冠（左^{かんざし}簪を亡失）を被る。口髭・顎髭をあらわす。袍^{ほう}を着し、袴を穿き、太刀を佩く。胸前で左手の上に右手を載せて笏^{しやく}（亡失）を執る。上畳座に坐す。袍は木瓜文をあらわす。像底に墨書あり。正平9年（1354）の作。

【法量】像高（巾子頂から）59.5cm、髮際高（冠際から）46.3cm、頂一顎（巾子頂から）26.0cm、面長 12.1cm、面幅 11.5cm、耳張 13.4cm、面奥 14.9cm、胸奥（中央）18.2cm、腹奥 18.8cm、臂張 39.4cm、袖張 60.8cm、膝張 47.9cm、坐奥（足先から）33.2cm、膝高（左）9.0cm、膝高（右）9.0cm

【像底墨書】

宝珠丸 摩珠丸（尼禅照／辻鶴女）／

奉造立御神躰事、正平九年（甲／午）三月廿日惣長者成阿／

（花押）／

〈後生善所〉

右意趣者、為現世安穩○子孫繁昌一門繁昌、殊別者／
金輪聖（王脱カ）天長地久御願円満所奉造立如件／

（改行は／にて、割書きは〈 〉で示した）

・神功皇后坐像

本殿向かって左側に祀られる。木造（ヒノキ）、寄木造、彩色。頭髮を両耳前で美豆良に結う。髮際の上に天冠台（宝冠は亡失）を有す。頸まわりには装飾環を掛ける。垂領の衣を着し、その上に着した上衣を腰辺まで下ろす。袴を穿き、その中に垂領の衣を着こめる。腰から両腕にかけて带状の衣を着す。両手の指を一本ずつ交互に組み、掌を内にして胸前に置き、持物を執るしぐさを示す（持物が存したか否かは不明）。上置座（後半部を亡失）に坐す。垂領衣は鳳凰丸文の間に雲文、縁は蔓唐草文、上衣は花形入り亀甲つなぎ丸文をあらわす。像内に納入品（卷子一卷）あり。像底に墨書あり。正平9年（1354）の作。

本像は、頸まわりに装飾環を掛け、带状の衣を腰から両腕に巻き、上衣を腰辺まで下ろすなど女性的な装いでありながら、衣を袴の内に着こめるといった活動的な着方もしており、また、面相や、頭髮を正中で分け美豆良に結う髪型がまるで童子のようであるなど、非常に特徴的な形姿である。これは、『日本書紀』に記された神功皇后による西征の際における「暫仮=男貌-」や「為=男束装-」という言葉説に基づく姿と考えられており、美豆良は、筑紫国香椎宮（福岡県福岡市）にて靈験の有無を問いて髪を海水で洗いだ時、願い通り髪が自然と二つに分かれ、それを結び分けたとすることに拠り、また聡明な童子の如き面相や袴姿も、男の装いをしたとすることに依拠したとされる。

【法量】像高 52.5cm、髮際高 45.8cm、頂一顎 18.0cm、面長 12.5cm、面幅 11.3cm、耳張 14.1cm、美豆良張 19.9cm、面奥 15.0cm、胸奥（左） 17.5cm、腹奥 18.2cm、臂張 38.6cm、袖張（現状） 56.1cm、膝張 45.4cm、坐奥 39.0cm、膝高（左） 9.1cm、膝高（右） 9.1cm

【像底墨書】

正平九年〈甲／午〉三月廿日／

奉造立施主善定都維那師／

作者頼円法眼 子息実円／

○若宮神坐像

・和若宮神坐像

本殿中央、僧形八幡神坐像に向かって右側に祀られる。木造（ヒノキ）、一木造、彩色。穏やかな相を示す童子形。頭髮を正中で分け、両耳前で括り、その先を両胸前から両足膝辺まで垂らす。半臂の上に袍を着し、石帯の先を腰に締め、袴を穿き、襪を履く。両手は袖中に入れ、拱手し、坐す。両手で持物を執った形跡はない。半臂の縁に花形入り亀甲繫ぎ文、袍に雲飛鶴文、石帯には連丸文をあらわす。南北朝時代の作。

【法量】像高 20.2cm、髮際高 18.5cm、頂一顎 7.5cm、面長 5.5cm、面幅 4.7cm、耳張 5.9cm、面

奥 6.6cm、胸奥 11.0cm、袖張 14.4cm、臂張 15.6cm、膝張 20.2cm、坐奥（足先から）15.0cm、膝高（左）5.2cm、膝高（右）4.7cm

【品質構造】若宮神坐像 2 軀共通して、両体側を含む頭体幹部を一材から彫出し、両脚部に横材を短く。体部背面に薄板材を当てる。内割り無し。盛上げ彩色を施す。和若宮神坐像は像底正中に墨線を引き、根幹材正中及びそこからやや右寄りの位置に小孔（直径 4 mm、5 mm）をうがつ。荒若宮神坐像は両脚部像底に小孔（直径 5 mm）をうがつ。

・荒若宮神坐像

本殿中央、僧形八幡神坐像に向かって左側に祀られる。木造（ヒノキ）、一木造、彩色。両目を少し見開きぎみにする童子形。頭髪を正中で分け、両耳前で括り、その先を両胸前から両足膝辺まで垂らす。半臂の上に袍を着し、腰に石帯を締め、袴を穿き、襪を履き、坐す。左臂は屈して左胸前で持物（亡失）を執り、右手は両脚部の上へのせ掌を仰ぐ。右掌に持物を受ける小孔あり。半臂の縁に花文、袍に楓文、石帯には連丸文をあらわす。南北朝時代の作。

【法量】像高 19.2cm、髪際高 17.9cm、頂一顎 6.5cm、面長 4.7cm、面幅 5.0cm、耳張 4.8cm、面奥 6.3cm、胸奥 7.0cm、腹奥（右）9.5cm、臂張 15.7cm、膝張 16.7cm、袖張 20.1cm、坐奥（足先から）12.1cm、膝高（左）3.6cm、膝高（右）3.5cm

○附 神功皇后坐像像内納入品（紙本墨画・墨書日課地藏菩薩図像 1 卷）

縦約 24cm、全長約 5,781cm（一紙長約 30cm～40cm）、全 177 紙、楮紙、前欠、軸なし。

神功皇后坐像の像内に納められていた、千体の地藏菩薩像の描画を目指したと考えられる卷子。鼠損などによって前欠ではあるものの、現在 915 体確認できる（描画途中の数え間違いにより、当初から千体に 10 体不足する）。奥書には「正平八年（ミツトノノ）八月十八日 念阿弥陀仏（花押）」と記され、念阿弥陀仏が正平 8 年（1353）8 月 18 日に描き終えたことがわかる。

地藏菩薩像はほぼ全て同じ姿で描かれており、像高約 21cm、体をわずかに右へ向け、円頂を少しうつむき加減にし、左臂は屈して掌に宝珠を載せ、右手は垂下して錫杖を執り、単弁の蓮華座上に立つ。像の周囲には、頭光に地藏菩薩の種子が 6 字、像の右側に「南無阿弥陀仏」、その下に梵字で地藏菩薩の真言が墨書される。

また、地藏菩薩像の上方の所々には、描いた地藏菩薩像の数が記されるとともに、描いた月日も書き込まれている。そのため本巻子は、前欠ではあるものの、凡そ 45 日間をかけて、日課として千体の地藏菩薩像を描き続けた様子をうかがうことができ、完成までの書写過程が判明する。

像内納入品は摺仏が一般的であり、手描きによる日課仏像は意外に少ない。壺井八幡宮の日課地藏菩薩図像は、奈良県西大寺木造騎獅文殊菩薩の像内納入品である日課文殊菩薩図像（二百五十軀）（正安 3・4 年（1301・02））と日課文殊菩薩図像（正安 4 年）に次いで古いと思われる。

なお、僧形八幡神坐像と仲哀天皇坐像の像内にも巻子が納められていることを、像底の寄木の隙間から確認できる。現時点で取り出すことは出来ないものの、造立時の納入品が現存すると考えられる。

【奥書】

右志者、心中所願決定成就／

皆令満足臨修正念往生極樂／

乃至法界平等利益／

正平八年〈ミツノトノ／巳〉八月十八日 念阿弥陀仏／

(花押)／

南無阿弥陀仏／

南無地藏大菩薩／

○評価

本神像は保存状態が良好で、制作当初の繊細な彩色表現もよく残存している。相好は^{びもくしゅうらい}眉目秀麗であり、着衣の文様も多彩で華麗、神像としての気品を備えた優品といえる。また、像底墨書銘などから摂津国の四天王寺仏所に属する大仏師によって正平9年（1354）に造像されたことが明らかであり、作者と制作年代が判明する南北朝時代の基準作となる神像である。造立時の納入品が伝わることも貴重である。そして、河内源氏の氏神、壺井八幡宮に伝来する八幡三神像と若宮神像であることが、歴史的にも意義深い。以上より本作は、本府にとって非常に重要な作例といえ、府指定有形文化財にふさわしい。

[参考文献]

伊東史朗「童子形神坐像 羽曳野市壺井八幡宮」伊東史朗総監修・本巻監修『神像彫刻重要資料集成 第三巻 関西編二』国書刊行会 2016

伊東史朗「神像新資料7 河内・壺井八幡宮の八幡三神像と若宮像」『仏教芸術』350 2017

田中健一「僧形八幡神坐像、男神坐像、女神坐像 羽曳野市壺井八幡宮」上掲『神像彫刻重要資料集成 第三巻 関西編二』

田中文英「中世編 第一章 莊園と武士の台頭」『羽曳野市史 第1巻 本文編1』 1997

松浦清「僧形八幡神像および男女神像 三軀 付 胎内納入品」『羽曳野市史 第7巻 史料編5』 1994

望月信成「鎌倉時代末期の円派彫刻と壺井八幡宮の神像」『帝塚山学院大学研究論集』11 1976

山本勉『日本の美術 493 南北朝時代の彫刻—唐様の仏像と伝統の残照』至文堂 2007



僧形八幡神坐像



仲哀天皇坐像



神功皇后坐像



若宮神坐像（左：荒若宮神坐像 右：和若宮神坐像）



仲哀天皇坐像像底墨書銘



神功皇后坐像像底墨書銘



附 神功皇后坐像像内納入品（紙本墨画墨書日課地藏菩薩図像）